



花鳥餘情

三





第七

留才  
花里

第八

海磨  
明石

第九

珍標  
同屋  
蓮生



僧正慈海



花鳥餘情第七

七男才

賢才

花散里

木街文庫

以割及新考卷者之け中を母の二ヶ年此事取の傳中  
廿二歳の九月より廿四歳の春までを事とし  
ひつみら思ふら給 元々みら直路也

おやういしてらるる例いともあうりきれい

村との所女親子内親と天延三年の母言のりて

下向のり時所母御の女王 重明親 ういてらるる給

口は乃物後、古く桑本具不と御の女とますて

中へ入れいさきうりては母のあいらういておのれ 例

口は乃物後、古く桑本具不と御の女とますて

かのももれ 例 古く桑本具不と御の女とますて











都よりいひてくらひ給ふ申上よりある也  
十七日酉より入る所 御女群行れ日西河より申  
御の事行り候の程申上府麻とてまら  
申あつち

らり候りし

延壽式之凡御内親之條行願定監送使奉儀人  
或心中御之并一人使一人古位下官一人西官一人  
着陣定席席大中納之各一人奉儀二人位下  
勅使中納言奉儀各一人位下二人長送使中納言  
若奉儀并史中將各一人已上奉儀以下外託  
作式部  
今案那行の日席席と勅使と行原と奉儀奉

とく席奉す長奉送使の伊勢もてまら  
とてまらしてよ所の時と揚給よとてまら申上  
あつち下志のよと奉儀下つれとてまら  
御申上とく作らる事

宣令 朝掛興

高とくあつち

御女群行れとてまら  
とてまらしてよ所の時と揚給よとてまら申上  
御女群行れとてまら  
又つちあつち  
御女群行れとてまら



























雲林院ふしんいん

國史云天長九年四月辛酉高僧<sup>北</sup>章紫野院  
中<sup>ニ</sup>釣<sup>ト</sup>基<sup>ニ</sup>院<sup>ヲ</sup>司<sup>シ</sup>命<sup>シ</sup>陪<sup>シ</sup>信<sup>シ</sup>文<sup>シ</sup>人<sup>ニ</sup>賦<sup>シ</sup>詔<sup>シ</sup>初<sup>ニ</sup>和<sup>シ</sup>成<sup>シ</sup>賜<sup>シ</sup>祿<sup>シ</sup>有  
差<sup>ル</sup>新<sup>ニ</sup>撰<sup>ル</sup>院<sup>名</sup>為<sup>ス</sup>雲<sup>林</sup>院<sup>ト</sup>

承<sup>和</sup>二年八月辛巳<sup>北</sup>章<sup>北</sup>紫野<sup>北</sup>院<sup>北</sup>用<sup>北</sup>紫<sup>北</sup>野<sup>北</sup>池<sup>北</sup>塘  
錫<sup>ノ</sup>宴<sup>ヲ</sup>群<sup>臣</sup>日<sup>暮</sup>有<sup>還</sup>宮<sup>ノ</sup>

元慶八年九月十日丁卯權僧正法<sup>下</sup>大和<sup>向</sup>信<sup>通</sup>昭<sup>奏</sup>  
言<sup>雲</sup>林<sup>院</sup>者<sup>故</sup>所<sup>常</sup>康<sup>親</sup>王<sup>之</sup>舊<sup>居</sup>也<sup>親</sup>王<sup>之</sup>家  
乃<sup>沙</sup>門<sup>自</sup>觀<sup>十</sup>一年二月十日<sup>以</sup>院<sup>付</sup>通<sup>昭</sup>曰<sup>深</sup>草  
天<sup>白</sup>信<sup>住</sup>居<sup>之</sup>天<sup>白</sup>信<sup>意</sup>巡<sup>常</sup>康<sup>滿</sup>野<sup>日</sup>天<sup>國</sup>  
極<sup>德</sup>猶<sup>難</sup>報<sup>恩</sup>願<sup>永</sup>為<sup>精</sup>舍<sup>令</sup>學<sup>子</sup>天<sup>台</sup>教<sup>依</sup>  
思<sup>元</sup>慶<sup>寺</sup>永<sup>賜</sup>年<sup>分</sup>度<sup>者</sup>三<sup>人</sup>傳<sup>天</sup>台<sup>法</sup>門<sup>誠</sup>

度<sup>ノ</sup>道<sup>請</sup>以<sup>為</sup>元<sup>慶</sup>寺<sup>別</sup>院<sup>成</sup>親<sup>王</sup>之<sup>心</sup>願<sup>云</sup>院<sup>中</sup>雜  
更<sup>擇</sup>通<sup>昭</sup>門<sup>徒</sup>中<sup>堪</sup>幹<sup>事</sup>者<sup>令</sup>其<sup>向</sup>當<sup>勅</sup>依<sup>請</sup>聽<sup>之</sup>

河<sup>内</sup>府<sup>人</sup>寸<sup>青</sup>論<sup>義</sup>也

か<sup>く</sup>と<sup>あ</sup>て<sup>に</sup>院<sup>名</sup>を<sup>定</sup>む

多<sup>少</sup>の<sup>事</sup>を<sup>考</sup>へ<sup>て</sup>院<sup>名</sup>を<sup>定</sup>む

并<sup>院</sup>名<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>て<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

し<sup>ら</sup>べ<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

毎<sup>院</sup>名<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>て<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

ま<sup>た</sup>に<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

か<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>て<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>て<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

ま<sup>た</sup>に<sup>し</sup>め<sup>り</sup>し<sup>り</sup>



あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく

あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく

あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく

あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく

あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく

あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく  
あはれなるに女はさしつかへなく



ち子母よはれんてるる何

本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
ね事ごとく

身の物うたはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
ね事ごとく

と業あつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの

破院周囲の歌

あつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
ね事ごとく

つ結るもあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
本所よりあつた物もあはれぬもの  
ひきかへしあつた物もあはれぬもの  
ね事ごとく















花らりし人出づり申川にての事人そを  
海にたのめし海にたのめし海にたのめし海にたのめし

とららるるを思われぬ都にあらはるる宿にまは  
しとららるるに可葉よひ百千とららるるにまは

はく一の又高

大蔵のこゝろにまはるる海にたのめし海にたのめし  
まはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

こららるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

こららるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

申川にたのめし

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

こららるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

こららるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

女師のまはるる

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

おまはるるにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

花鳥餘情牙八 海磨 明石

九酒磨

心新再刻為春夕の源氏女又某三月廿余日海磨



浦上隠居の事ありて  
け美の事あり

かうゆりていふ事ありて  
海軍大將海軍の家、隠居の事、  
平中納言の事ありて、  
の詔よりして東伝を申す、  
又菅相西玄の事ありて、  
野相の隠居の事ありて、  
伊周の事ありて、  
み多の事ありて、  
され給ふ事ありて、  
多き事ありて、

自稱をいふ事ありて、  
三月廿日ありて、  
西宮の事ありて、  
わく事ありて、

執居の事ありて、  
たの事ありて、  
やあ事ありて、  
る事ありて、  
ちあ事ありて、  
る事ありて、  
事ありて、







あつきのうしつれいしりめいんはくち

江文通の別賦云 躋然銷魂者唯別而已矣

あつきのうしつれいしりめいんはくち

一平あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

唐の詩

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

文集のうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち

あつきのうしつれいしりめいんはくち



















まづうして海をうらむはさきやまにきしひさく  
河海にうらむはあやめはなははるるの指事と  
のきしひさくはさきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と  
さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と  
さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と

かづのさきひさくはさきやまにきしひさく  
雁橋とひさくはさきやまにきしひさく  
さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と

さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と  
さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と

さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と  
さきやまにきしひさく  
はなははるるの指事と



あつたはらひのたれをたれにたれをたれに

ゆきよのたれにたれにたれにたれにたれに

朱雀渡のたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

よして又たれにたれにたれにたれにたれに

源氏にたれにたれにたれにたれにたれに

ゆてたれにたれにたれにたれにたれに

菅原相のたれにたれにたれにたれにたれに

口けにたれにたれにたれにたれにたれに

けあるにたれにたれにたれにたれにたれに

よしてたれにたれにたれにたれにたれに

は服を明の國へゆきかへ

は服を明の國へゆきかへ嫁をたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

あつた浦にたれにたれにたれにたれに

日本にたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに

たれにたれにたれにたれにたれにたれに



くくくくくく

苦病

わろくくくくくくく

伊豫物産のわろくくくくくく十餘國の中とり

我國のくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

姓の人くくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく



































































祢乃又き祢乃いより

逢まてあまの奥申はくしんかひのいんか  
中紅のいんかより十まての終紅よりよも御紅のま

これ祢乃いんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか

いんかひのいんかひのいんかひのいんか



よきこと申す事は海に...  
のき...の善徳...  
の對...  
まろく...  
あんと...  
ひん...  
い...  
いよ...  
のあり...  
い...  
配流の人百...  
叙丁と...  
三...  
三...  
最...  
丁...  
納...  
師...  
最...  
人...  
之...  
乃...  
官...  
控...

よきこと申す事は海に...  
のき...の善徳...  
の對...  
まろく...  
あんと...  
ひん...  
い...  
いよ...  
のあり...  
い...  
配流の人百...  
叙丁と...  
三...  
三...  
最...  
丁...  
納...  
師...  
最...  
人...  
之...  
乃...  
官...  
控...

三...  
三...  
最...  
丁...  
納...  
師...  
最...  
人...  
之...  
乃...  
官...  
控...



て源氏を待たぬ物なるは中なる  
人納まらば一人格十人なる

とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

一とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

まはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

託しは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

しうまは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

いふは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

よはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

素来鳴き物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

まはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

いふは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

後要するは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

乃下柱とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

とては物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

子のあは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

みり物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

まはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

おはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

うららば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

あはらば物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

いふは物思ふは物思ふは物思ふは物思ふ

信分年



穀はわが家の稻とてはるくわがものなれば  
阿の浦の初より人の辛くもつたつた  
てはあつたてはらつた部よつたてのり  
人さしあつたての初つたつた  
わが家の稲とてはるくわがものなれば  
阿の浦の初より人の辛くもつたつた  
てはあつたてはらつた部よつたてのり  
人さしあつたての初つたつた

或は... 後... 部... 人... 初... 部...  
わが家の稲とてはるくわがものなれば  
阿の浦の初より人の辛くもつたつた  
てはあつたてはらつた部よつたてのり  
人さしあつたての初つたつた







こもあのみほくさるる  
そは朱雀院の古仏の思ふた人  
るは勝月太の朱雀院と源氏の思ふ  
はすは思ふた人さうくさるる  
さくわんれいふふふふふふ

朱雀院の戒心はさるる  
よまもあはるる  
あはるる  
あはるる

らへれれれれれれれれ  
天白古元服のころを  
さくわんれいふふふふふふ  
さくわんれいふふふふふふ  
さくわんれいふふふふふふ

稱治冷泉院十一して元服ありて  
位よりよりより元服のころ  
清和天皇自觀六年元服あり  
仁徳天皇元服のころ  
これ年数あり忠臣の例  
人の國をさるる  
漢高祖殿より  
子よりよりより元服のころ  
さくわんれいふふふふふふ  
さくわんれいふふふふふふ  
さくわんれいふふふふふふ  
さくわんれいふふふふふふ







世よりいふなりけり泉院明るの中まゝに  
きつた又いふ泉院とある申交す申の  
中よりいふはうをうれ申といふ今をゆも  
市川とあるはうをうれ申といふ今をゆも  
但く言ふは川とあるはうをうれ申といふ  
後の罪をいふ申の中一書身ありといふ  
ク言ふ申といふ豊道といふも物終りといふ  
こつあはるる言ふはうをうれ申といふ  
つま物といふはうをうれ申といふ今を  
又申の申といふはうをうれ申といふ今を  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ

いふはうをうれ申

二院といふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
ていふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ

いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ

いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ  
いふはうをうれ申といふ今をうれ申といふ







Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page. It begins with a large initial letter, possibly 'ب' (Ba), and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of the Maghrebi or Andalusī style.

Handwritten text in Arabic script, continuing the text from the previous page. It features a large initial letter, possibly 'ب' (Ba), and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of the Maghrebi or Andalusī style.



京よりあははのえいにおもむいしつてあつた  
しつれのしきくはつりつたものさしつてあつた  
かつたあつたしつたあつたあつたあつたあつた  
院のきけの事

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
受領しつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた























こゝろをくわむ月つら

徳氏廿八の歳二月の内に入りて  
ふかしくつらふかしくつら

花らつ甲斐のふかしくつら  
つらふかしくつら

つらふかしくつら  
つらふかしくつら

つらふかしくつら  
つらふかしくつら

つらふかしくつら  
つらふかしくつら

つらふかしくつら  
つらふかしくつら

男も女も

つらふかしくつら

つらふかしくつら

つらふかしくつら

つらふかしくつら

つらふかしくつら

つらふかしくつら















